



わたなべ・としお 1939年山梨県生まれ。70年慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、大学院国際協力学研究科委員長などを経て、2005年より学長、11年12月より総長・学長、13年総長専任、15年12月学事顧問。

平昌冬季五輪後、揺れ動く東アジア情勢の中で 米トランプ政権のデイル主義、中国の プレゼンス増大の中、日本の立ち位置は？

北朝鮮が軍事力強化に動き、政権交代後の韓国が北に近づく中、日本はどう動くべきか——。「戦後70年間、米国の傘の下で日本は緊張感を失ってしまった」と指摘するのは拓殖大学学事顧問の渡辺利夫氏。今、日本では安倍晋三首相が憲法9条に自衛隊を明記する「加憲」を模索している。それに対する賛否は拮抗しているが、迫りくる脅威に対して日本がどう対応するかが問われる時だ。

答える人 拓殖大学学事顧問
渡辺 利夫
Watanabe Toshio

「非公開文書」を公開した背景

—— 前回、韓国が慰安婦問題の解決を巡る日韓交渉過程で用いられた非公開文書を公開したというお話をしましたが、この影響をどう見ますか。

渡辺 公開が韓国を利したかという点で逆でした。例えば、この非公開文書により、韓国政府は、慰安婦を「性奴隷」とは呼称せず、公式名称は、「日本軍慰安婦被害者問題」であると書いています。また、慰安婦像の移転や設置も関連する諸団体

の説得に努めるという合意までありました。—— 韓国はどういう考えなんでしょうね。

渡辺 韓国は儒教社会ですが、中心の方が価値が高く、周辺は価値が低いという思考方法があります。これは中華思想と言われるものですが、朝鮮は「小中華」といって、さらに中華主義的な秩序を重んじている国なんです。

600年余前に李朝が生まれ、その時代の中国は明国でした。その明が満州族（女真族）に征服されて生まれたのが清で

と思いますが、観念ですから韓国は100%取らないと気が済まない。慰安婦問題は永遠に解決しないと思います。

だからこそ、安倍首相も当時の岸田文雄外相と相当議論したのでしょね。菅義偉官房長官も「ゴールポストは1ミリの動かしなさい」と言っていますから、日本側ももう動かないでしょうし、動いたら政府がもたないでしょうね。

す。朝鮮からすると清は東の「蛮族」によって侵略された征服王朝です。朝鮮は中国に仕えることでは満足ができなくなり、儒教的な本家本元は自分たちの方だと考えるようになっていきます。

その思想を基に日本を見ると、財宝を篡奪して帰る野蛮な民族であり、常に侵略的な心理を持つ国だという刷り込みがなされていくわけです。ですから従軍慰安婦問題は、下劣なる蛮族によって、典雅なる王朝の子女が凌辱を受けたという感覚なんです。

—— 安倍首相が平昌五輪に出席することに對しても、相当な反対論がありましたね。

渡辺 もちろんですね。一昨年の慰安婦問題の合意について「最終的かつ不可逆的」と言っています。1965年に日韓基本条約を結んで、日本と韓国は国交を回復しました。同時に結ばれた経済協力・賠償請求権協定の最後に「日韓の請求権問題は、これにより完全かつ最終的に決着した」と書いてあります。今回とほとんど同じ言葉ですよ。

そういう言葉を書き入れる外交文書は普通ありません。文言化して国民同士、国際社会に見せなければ危ないという認識が日本政府にあったのでしょね。

慰安婦問題、サハリン在住の韓国人問題、徴用工事故の問題など多くの課題があります。日韓基本条約の交渉は10年以上続きました。日本の外交交渉の中で最も長期で、最も困難なテーマでした。しかし、交渉の結果

同じことを自分たちがベトナムで、米兵が日本でやっていたりしていますから、戦争は常にそういう問題が付きまとうというところは理性的に考えればわかるはずですが、日本人のやったことだけは許せない。韓国の反日は伝統的な観念から来ているもので、その克服は容易なものではありません。

—— 難しい隣国関係ですが、外交交渉でそうした難問を解決していけるのかどうか。

渡辺 外交交渉は100%得ることは難しく、45%譲歩して55%を得るといふ類のものだ

「完全かつ最終的」に解決したはずでした。慰安婦問題で日本が屈する理由などどこにもありません。

日本の戦後は左翼リベラリズムの非常に強い時期で贖罪意識のようなものがあり、韓国は例外だということで譲歩に譲歩を重ねてきた。何回謝罪をしたか数えきれないほどです。

福沢諭吉の「脱亜論」

—— 福沢諭吉が「脱亜論」を主張したのも、朝鮮に対する失望からでしたね。

渡辺 ええ。福沢は前回お話しした甲申事変の頃まで、朝鮮に「恋」をしていたのだと思います。福沢は幕末33年、明治33年を生き、66歳で亡くなりますが、幕末期からものを書きはじめ、亡くなる前日まで書き続けていました。



福沢は、明治維新時点では幕臣でした。幕臣として何もできずに明治維新をやり過ごしてしまつたという、ある種の悔やみの気分が福沢の中に眠っていたのではないかと推測しています。

そこで今度は朝鮮で開国維新にかかわろうと。留学生を受け入れ、門下生を送り、クーデターを支援するという形で朝鮮の近代化を志向した。しかし、それが潰えたことで「恋」が冷め、「脱亜論」に向かうのです。

明治30年の時事新報に寄せた福沢の朝鮮論には「このような国民とはどんな約束を結んでも、背信と違約は彼らの本性なのだから、これに意を介する必要はまったくない。すでにこれまでの外交においてもしばしば経験済みのものであり、朝鮮人相手の約束ならば、はなから無効のものだと覚悟して、その上で実利を得るより他に方法は無い」とまで書いてあります。

我々現代日本人の心情にもびつたり符号する内容になっています。しかし、そうかといつがいつの間にか日本人の中から消えてしまつています。しかし東西冷戦が終結して30年が経ち、米国の相対的な力が弱まり、中国のプレゼンスが大きくなつていくのが現状です。

米国は建国以来、様々な選択を採ってきました。有名なものに「モンロー主義」、つまり孤立主義があります。米国が欧州のことに口を出さない代わりに、欧州も米国に口を出さないでくれということでした。

ただ、米国ほど巨大で、国内でフルセット完結できるような大国は内に籠ることが可能ですが、絶対に孤立できないのが日本です。今、米国に孤立されたら日本は生きていきませんが、その兆しは出てきています。

——その兆しとは？

渡辺 例えば尖閣問題です。中国の公船、つまり潜水艦までが接続水域まで入つたわけですから、次は領海に入るかもしれませんし、もしかしたら上陸するかもしれない。

これはまさに個別的自衛権の

で日本は引越すわけにもいかない。

——まさに引越すの出来ない関係ですが、解決はなかなか難しいですね。

渡辺 難しいですね。前回お話しした韓国の保守派が何を考えているかについて、さらに2つ申し上げると、1つは数人の人が一致して言っていたのは、米韓同盟が消滅する危険性があるということでした。

トランプ政権は北朝鮮に対するオプシオンがなく、いざれ先制攻撃するだろうという見方が彼らには強い。その時、米国は米韓同盟を結んでいきますから、韓国の承認を得ずに北を攻撃するというオプシオンはありません。

しかし、米国が韓国に先制攻撃の意図を伝えても文在寅は反対するでしょうから、米国は米韓同盟を破棄し、行動の自由を得て先制攻撃をするだろうと、韓国の保守派は見っていました。

もう1つは、もう1、2回北朝鮮が実験を行うと、米西海岸に

まで届くミサイルになるだろうと言っていました。そうなる

と米国の世論は怯え、その怯えにトランプ大統領も抗することができず、北朝鮮を核保有国として認定し、米朝の平和条約が視野に入ってくるというものです。

米国は、北朝鮮を「不倶戴天」の敵だとは思っているわけではないです。ただ、核ミサイルを米国に向けてきそうなので、それを制したいがために行動しているわけですね。その行動がもし急を要するということになれば、トランプはすぐに姿勢を変える可能性がある。

平和条約を結べば、在韓米軍の存在意義がなくなり凋落します。場合によってはグアムも必要なくなります。そうなる北朝鮮の力が南に出て来る、韓国はこれを南北統一だといって歓迎する可能性があります。それを中国が黙っているはずがなく半島に勢力をせり出してくることは間違いありません。この2つの極端なシナリオの可能性があるので。

——それは憲法改正も含めていいます。安倍政権のうちにやらなければおしまいだと思います。

渡辺 そうです。今、出ているのが憲法9条の1項、2項を残して、3項に自衛隊の根拠規定を入れるという案ですが、最後には国民投票にまでかけられますから、現代の政治状況からすれば致し方ないリアリズムかもしれないと思います。

ただ、これはワンステップです。改正したという事実が何よりも重いですから、2番目の選択がより容易になる可能性がイメージしているのではないかと想像します。2項をそのままでは3項に根拠規定を入れるというのには理屈としてはおかしいわけですが。

「独立自尊」など明治初期に言われていた言葉が、リアリズムを持って我々の胸に響いてくるというのは不思議な話です。

——自立自衛、自分の他に

いずれにしても、日清戦争開戦前夜の東アジアの地政学に非常に酷似しています。

——韓国保守派は日本に対しては何を言っていますか。

渡辺 日本は今、GDP（国内総生産）の1%の軍事費をどうするかという議論をしているが、そんな悠長な状況ではない。つまり、在韓米軍がいたからこそ、日本は軍事費を抑えることができたのだということ。日本の軍事費増加は不可欠だということ。

また核保有論議を日本は封じているけれども、そんなことで今後の日本がもつんでしようかとも言っていました。

米国の孤立主義に日本はどう向き合おう？

——複雑な地政学の状況下、日本は自分の国は自分で守るといふ本質的な部分から再出発しないといけないと思います。

渡辺 そうですね。「独立自尊」、「自主独立」という気構え

誰も助ける人はいないという原点到ち返つて、もう一回考え直す時だということですね。

渡辺 はい。日清戦争時の外相は陸奥宗光、日露戦争時は小村寿太郎でした。彼らが後世語られる名外相だと言われた理由は、やはり時代がそういう人を求めていたからだだと思います。

国際情勢についての判断に1つでも狂いがあれば、日本は存在し得なかつたという時代状況だったわけですね。まさに生死を賭した決断をしてきたからこそ、後世に名を残したのです。

この70年余、日本は米国の傘の下で過ごしてきたことで緊張感を失つてしまいました。

——我々自身に問いが突きつけられていると。

渡辺 そうです。70年余のツケを払い飛ばすために、朝鮮半島問題は一つのテストケースになるのではないのでしょうか。これで9条を動かすことができなければ日本は自滅するほかありません。それだけの覚悟が本当にあるのかどうかです。(了)